

プロジェクト法

上越教育大学教授 高田 喜久司

1. いま、なぜ「プロジェクト法」か

プロジェクト法 (The Project Method) はアメリカにおいて、20世紀初頭から実践の萌芽が見られ、1910年代に普及し、1920年代中ごろにかけて高揚期を迎えた経験主義教育による代表的な学習指導の方法あるいは理論である。特に、1910年から1920年までの10年間はアメリカ教育界あげての流行時代であったといわれる。

プロジェクト法は知識偏重の伝統的教育を否定し、現実の生活に立脚した生活教育を強調するものであった。わが国には大正自由教育期に導入され、戦後の新教育において再び注目をあび、教科の論理よりも生活経験を、教授よりも学習を重視する新しい教育内容・方法論が求められたこともあって、問題解決学習とともにプロジェクト法に大きな期待が寄せられたのである。一般には「プロジェクト・メソッド」「構案教授」「構案法」「作業案法」などと訳され使用されている。

さて、プロジェクト法といえばキルパトリック (Kilpatrick, W. H. 1871-1952) と受け止められるほど、彼はプロジェクト法の大成者として有名である。

1918年、キルパトリックは、論文『プロジェクト・メソッド』を著し、プロジェクト法のエッセンスを提示した。この時期の流行的な実践と理論に関する一つの総決算ともいえる論文であったと位置づけられよう。

プロジェクト法のエッセンスは、子どもの学びは「目的的活動」の遂行であるというテ

ーゼから、「目的的活動」の単位として「目的・計画・遂行・判断」の4段階を経るプロジェクト法による新しい単元学習を定式化した点に求められる。それは、子どもの自己活動や豊富な経験を重視する新教育あるいは進歩主義教育運動の理念を明らかにしたものと、歴史的な意義を有するのである。

しかし、大成者はキルパトリックであるにしても、プロジェクト法は元来、特定の個人の提唱によって出現したものではないことに留意しなければならぬ。教育界でかなり広く実践されるようになってから、その理論構築がなされたといえよう。プロジェクト法はいわば「実践の理論化」を図ったものと考えられ、他の学習指導法の誕生とは異なるユニークな様相を呈している。

すなわち彼が論文を書いた1918年以前に、ほぼ20年にわたるプロジェクト法の歴史があったのである。そのプロジェクト法が教育哲学でもって基礎づけられ、確立した教育理論として認知されるうえで、キルパトリックの果たした役割は大きいといえる(1)。

生活教育を標榜するプロジェクト法は、当然のことながら、分立した各教科の知識内容を受容的に学習させることに反対する。子どもの生活や経験に基盤をおきつつカリキュラムの統合を図って、家庭や地域社会の生活の実際を学校教育に取り入れ、学校を改革しようとするねらいがあった。このため、意味のある活動や経験を、子どもの自発性に基づいたプロジェクトとして子ども自身に企画・計画・実行させ、生活に役立つ知識と能力を獲

得するように学習活動を組織することが強調された。

プロジェクト法の理論が、わが国の今日的な学校改革の動向と歴史的・社会的推移を無視してストレートに結びつけて考えることはできないが、その理論的基盤を与えてくれるようにも思えるのである。例えばものづくりや生産活動など体験的な学習、問題解決的な学習を取り入れる配慮が要請される「総合学習」の理論や実践、さらに知識と生活との結びつき、「知の総合化」の視点を重視した教育活動の展開が求められている現状を視野に入れるならば、キルパトリックが説き続けた「学校と社会の結合」「学習と生活の結合」の考え方やプロジェクト法を、その真髓において理解する今日的意義は大きいのである。

以上記してきたことを全般的に確かめ、初期のプロジェクト法の展開、キルパトリックのプロジェクト法の理論とその諸相について検討することにしたい。

2. 初期プロジェクト法の展開

(1) 「プロジェクト」の語源的意味

等閑に付してきたが、そもそも「プロジェクト」(project)とは何を意味するのであろうか。

プロジェクトは語源的には、まず「投げ出す」「投影する」「(心のなかから投げ出して)客観化する」「考案する」「計画する」「企画する」という意味を持つ。すなわち他者から何かを与えられるのではなく、自分の思うこと、心にあることを客観的に外へ投げ出し、具体化・現実化するため、自ら計画を立てて目的を達成する活動のことである。

次に名詞的用法では、「計画」「企画」「事業」「研究計画」「学習課題」という意味になる。そのため今日でも教育の領域にとどまらず、農業・工業などの産業界をはじめ医学界や出版界などさまざまな分野で多用されていることは周知の通りである。

(2) 「プロジェクト」の起源

アメリカにおいてプロジェクトが教育用語としていつごろから使われるようになったのか。これについては諸説があって必ずしも明確ではない。教育関係者がこれを使用する以前には、土木技師が測量などについて使用したともいわれている。

通例は、1901年コロンビア大学教授のリチャーズ(Richards, C. R.)が手工教育(manual training)の実験で用いたのが教育指導上の起源とされている。

彼は、一定のモデルを模倣して作品を製作する従来の手工教育のやり方に対して、子どもの自己表現としての「手仕事」(hand work)を「プロジェクト」と位置づけた。そしてその観点から、子ども自身が計画をたてて作品を製作していく新たな方法を採用したのである。

手工的作業を子どもが自主的に進めていく活動がプロジェクトの意味である。すなわち1900年ごろのプロジェクトは、ある作品の製作に含まれる実際の課題を表すために使われたと解されるのである。

(3) 農業教育のプロジェクト

しかし、プロジェクトという言葉が広く普及するようになったのは農業教育においてであったとされる。

当時アメリカの農村では、少年少女の農業クラブがつくられ、そこで、1エーカーの土地でどのクラブが最も多くの収穫をあげるかという多収穫競争が流行していたといわれる。その計画的な仕事のひとまとまりがプロジェクトと呼ばれたのである。ところが、収穫をあげるためには、どうしても学校で学んだ農業に関する知識・技術を応用したり、また必要に応じて、これらを習得していかなければならなかった。

こういった事態を学校の側からとりあげたのが、マサチューセッツ州ノーサンプトンのスミス農業学校のスティムソン(Stimson,

R.W.) 校長であった。彼のやり方は端的に
いえば、「ホーム・プロジェクト」(home pr
oject)といわれる農業教育法といえる。

1908年、スティムソンは、家庭作業で穀物
栽培や家畜の飼育を子どもの責任によって実
習させる方法を取り入れ、この家庭作業をホ
ーム・プロジェクトと名づけたのである。

ホーム・プロジェクトは、農作業によって
実地に農業教育をやることであり、子どもが
自分の家庭でやったり、子ども同士のクラブ
でやっていた農作業と、学校の授業とを連結
させるところに特質がある。

具体的に例えば、子どもが家庭作業で麦を
栽培するには、土壌の様子を調べたり、耕作
・種まき・排水・収穫・出荷に至るまでいろ
いろな問題に直面し、これを解決しなければ
ならない。子どもはすでに学校で学習した事
項を応用したり、ときには学習しないことを
補習し、学習する機会が与えられる。

アメリカにおいて産業教育が盛んになり始
めていた時でもあり、このやり方が好成绩を
収めたというので注目をあつめ、州教育委員
会も観察や調査にのりだした。そして、1911
年にホーム・プロジェクトには十分な教育的
価値が認められると報告している。

すなわち農業プロジェクトは、農園の改善
に貢献する目的をもって試験的に生産を増強
するねらいがある。しかし、生産を高めるこ
とをねらいとしつつも、農園において一定の
準備、一定の原料、一定の時間のもとで遂行
されるそのプロセスには、純然たる教育目的
や価値を備えていると考えられたのである。

(4)初期プロジェクト法の性格と意義

こうした初期のプロジェクト法は農業学校
でやっていた偶然的な仕事、いわば一つの思
いつきのものが出発点となって、やがて教
育的意味が与えられていったのである。この
考え方が広く各州に導入されるにつれ、その
適用範囲も農業から工業や家庭科、さらに実
習や実験が重視される理科教育などに適用さ

れていくのである。

ホーム・プロジェクトの実践が普及するに
つれ、多くの教育学者が理論構成に取りかか
るようになる。

例えば、コロンビア大学の教授で、キルパ
トリックに大きな影響をもたらすスネッデン
(Snedden, D.)は、「教授単元としてのプ
ロジェクト」(1916)という論文で、「パン
を焼く、ブラウスの製作、とうもろこしの栽
培、テーブルの製作、ベルの取り付けといっ
た作業を、子ども自らが計画し、そこから知
識や経験の獲得をもたらすように組織したも
の(2)」をプロジェクトと呼んだ。

そして、スネッデンによれば、プロジェク
トの基本的性格は、次のように把握されてい
るのである(3)。

- ① 仕事は常にある統一を有していた。
- ② 子ども自身は達成されるべき実際の目的
や結果を想定し、この結果は自らにとって
意味があるものとして期待されていた。
- ③ 達成の基準が客観的であるため、子ども
は製作物の価値に関して決定できた。
- ④ 子どもは目的を達成するにあたって、以
前の知識や技能を適用し、また新しい知識
や経験を獲得したに違いない。

これまでの検討から、初期のプロジェクト
には、子どもが自ら計画し、実行するという
意味のほかに、次のような意義が認められよ
う。

第1に、学校での学習と家庭・地域の作業
を結合する意図がある。

第2に、プロジェクトの展開は現実の生活
や現実の教育過程そのものであって、プロジ
ェクトを通じて、子どもは社会の生活を豊富
に体験したり、内容を得ることができる。

第3に、プロジェクトは具体的にものを生
産するねらいがある。

第4に、どのプロジェクトの解釈も比較的
狭義に捉えられたものであり、その作業は身
体的・手技的・実際のな仕事に限定されてい

る。

このように、プロジェクト法は農業もしくは作業的・技術的学習と結合して用いられたのであるが、このことは、プロジェクトの意義を考えるうえで重視されなければならない。そして、限定的かつ狭い意味で使用された初期のプロジェクト法は、やがてすべての教科に適用される一般的な方法として、また新教育を代表する方法として結実を見ることになる。このプロジェクト法を新しい教育方法の根本原理として理論的に構築したのが、ほかならぬキルパトリックであった。

3. キルパトリックの「プロジェクト法」の理論

プロジェクト法に理論的根拠を与え、その普及に拍車をかけたのは、1918年に出されたキルパトリックの「プロジェクト・メソッド」という論文であった。この論文が大きな反響を呼び起こしたため、4年後には「教育過程における目的ある行為の利用」という副題をつけて、単行本として出版されている。わずか17頁の小さいがしかし影響力の強い論文といえるのである。

しだいに明らかになるが、この論文でキルパトリックはまずプロジェクトの定義を提示し、目的という言葉をも重視した「目的的活動」という概念を設定した。次に、この概念を性格形成にかかわる「附随学習」で補完し、これを基軸として生活教育の過程を理論的に究明することによって、多岐にわたるプロジェクト法の学習理論を統合したといえよう。ここではこれらのキーワードを中核としつつ、キルパトリックの「プロジェクト法」の理論を概観することにしたい。

(1) 「プロジェクト」の定義

キルパトリックは、まず、これまでの教育方法に関する理論を検討するうちに、教育過程の局面に関連する多数の重要な諸問題に直面することになる。そこで、彼はこれらの諸

問題を一つの概念に統一しておく必要があることを痛感する。

こうして最終的に見出したのが、学習の法則に合致し、しかも行為の倫理的性質をもたらす「全心を打ち込んだ力強い活動」(a wholehearted vigorous activity)であった。

そしてキルパトリックは、この統一概念を「社会的環境のなかで行われる全心を打ち込んだ目的的活動(4)」(wholehearted purposeful act carried on social surroundings)と規定し、これを簡潔に表わす言葉を「プロジェクト」という語に求めたのである。一般に「プロジェクト」を、「全心を込めた目的的活動」と定義づけるのは、この文脈においてである。以後、プロジェクト法は、キルパトリックによって定式化された理論を指すようになったといえる。

ところで、彼はこのプロジェクト概念をより明確にするため、模範的事例の一つとして「少女によるドレス製作」をあげて説明している。それは、次のような事例である。

「一少女が、ドレスを製作したと想定しよう。その少女は、心を打ち込んでそのドレスを製作しようと意図し、自分自身で、そう計画し、独力で作りあげたとすると、それこそ典型的な『プロジェクト』の好例と、私はいいたい。このドレス製作において、全心を打ち込んだ目的ある活動が、多種多様な社会的環境のなかで推し進められたわけである。そのドレス製作は、目的ある活動であったとはっきりといえる。そして、すでに、前もって形成されていたドレス製作の目的は、そのドレスづくりの過程に次々と展開されてくる新しい事態を克服し、全体として一つの統一をもたらすわけである。以上の説明から、ドレス製作中のその少女は全心を打ち込んだ状態にあった、ということがはっきりわかるのである(5)」。

この事例は、少女がプロジェクトの達成に

打ち込むのは、その活動が社会的環境のもとでの全心を打ち込んだ目的的活動であるからという説明である。なぜなら、制作中のドレスをその少女の友達や級友が見ていたはずであり、したがって、ドレスづくりに打ち込んでいる少女を取り巻く社会的環境のなかで進められていると考えられるからである。

(2) 教育活動の基礎としての「目的的活動」

プロジェクトの定義が示すように、キルパトリックの理論において「目的的活動」は重要なキーワードである。いかなる活動も教育的に意義ある活動となるためには、目的によって動機づけられなければならない。子ども自らが、自分のもっている目的の達成を目指してひたすら従事する「目的的活動」でなければならないからである。

ではこの「目的的活動」は、どのような意味をもつのであろうか。

キルパトリックは、「教育は生活である(6)」という根本的なテーゼから出発する。したがって生活それ自体、あるいは生活の典型的な単位が教育内容となり、カリキュラムの構成要素として考えられているのである。

それゆえ、子どもが学校で営む活動の原型は、現代社会で行われている生活活動ということになる。ところが彼は、生活活動のすべてが重要であるとしたのではない。教育活動の基礎として典型的な生活活動、すなわち現代の社会理想から見て「価値ある生活の典型的な単位(7)」(typical unit of worthy life)である「目的的活動」をすえたのである。

すなわち、大人にとっての価値ある生活が、子どもの学校でなすべき生活(すなわち、学習)の原型でなければならなかった。

したがって、キルパトリックは教育と生活、学習と生活を二分するのではなく、「教育の過程は価値ある生活と一体である」という考えを示している。「教育即生活」の思想である。

このような立場に立って、キルパトリックは、教育活動の基礎として「目的的活動」を重視している。自ら目的を設定し、その目的を実現するために綿密な計画を立て、その計画を意欲をもって、慎重な準備のもとで実現していくような活動、いわばプロジェクト的な活動をもって民主社会に貢献することが望まれるのである。

つまりキルパトリックによれば、自ら目的を立て、それを計画的に追求する人間が「理想的な人間像」という性質をもつ。民主主義社会の人間像はまさに「プロジェクト人」である。この意味において、プロジェクトはまた教育の目的であるといえるのである。

ここに至ってプロジェクトは学習の手段や方法にとどまらず、民主社会における人間の価値ある生活の在り方を意味するようになったことは、重要な観点である。子どもも大人も、プロジェクト的生活を営むことが要請されるからである。

また、学校の使命は、子どもたちにプロジェクト活動を経験させ、よりよきプロジェクト活動を実現させてゆくことになろう。それが人間にふさわしい生活の在り方ととらえられるからである。そして、このような生活を子どもたちが実現するよう援助・支援していくことが、教育の営みであると考えられたのである。

キルパトリックのプロジェクト法はこのような意味において、生活教育論の典型的な一表現であるといつてよからう。

かくして何か物を作る仕事だけがプロジェクトではなく、キルパトリックによれば、今や意義ある「目的的活動」によって子どもを「よりよき生活者」にまで育成することがプロジェクト法の真髓であると、広義に解釈されるようになったのである。すなわちプロジェクト法は、教育の全体を貫く唯一の方法を意味するようになったと解される。

(3) 「目的的活動」と学習効果の法則

キルパトリックは目的的活動の重要性をいろいろな側面から論じているが、すでに触れた目的的活動が学習法則に合致するという見解もその1つである。

彼はソーンダイク (Thorndike, E. L.) を援用して3種の学習法則である「準備」・「効果」・「練習」の各法則について解説し(8)、これらの法則に合致するのが目的的活動であると断じている。そのうち特に重視されたのは「効果の法則」である。

目的は態度や構えであるとされ、「目的的活動」の成功の効果が、満足感と呼び態度を強化し行動の変容を招き、ひいては性格形成を促進するというのである。

すなわちキルパトリックはまず、学習の結果として起こる反応を「第一次反応」(特定の知識・技能の習得)・「連合反応」(関連する領域の知識・技能もしくは偶然に得られるもの)・「附随反応」(一般的な情意的態度や理想・習慣など)の3種に区別し、連合反応と付随反応に大きな意義を与えている。

次に彼は、「目的的活動」と「強制された活動」がこれら3種の反応にどういう違いが生じるかを尻づくりを例にして大要、以下のように説明している(9)。

「第一次反応」では、作られた尻そのものは同じでも、目的的に製作にあたる場合は、これに成功すれば多大の満足が得られるばかりでなく、尻づくりそのものについてもより高度な技能と知識が得られる。しかし強制された場合には、教師の検閲を免れることだけ考えて尻づくりに大きな抵抗を感じ、また製作に直接関係する知識や技能の蓄積も期待されない。

「連合反応」では、目的的活動であれば意欲的に取り組むため豊富な反応が準備され、熟慮が重ねられ、成功して満足が得られることによって、一連の反応や思考を精神的な財産として持ち続けることになる。それに反して強制された場合は、思考活動が抑制され満

足が得られないため、活動が終われば反応や思考は消滅する。

「附随反応」では、目的的活動の場合には学校生活に満足し、それに喜びを感じ、さらに別のプロジェクトを計画するようにさえなるという。それが強制された場合には、学校を退屈なものと感じ、エネルギーの発散を他に求めるようになるというのである。

こうした観点からキルパトリックは、他から強制された活動の繰り返しに終始し、活動する子どもがもつ目的そのものを顧みない旧来の教育方法を糾弾するのである。その確証として彼は、論文「プロジェクト・メソッド」の末尾で、「子どもは本来、目的活動的な存在である」といい、次のように指摘している点は示唆深い。

「以前には強制的な教育が学校教育の唯一の方法として支配していたため、学校教育を目的のない無節操なものにし、子どもは自主的な個人としては育成されなかった。強制に対する反動的な面として、子どもの気紛れを認め、子どもの機嫌とりをして、子どもを信頼する者もあった。本論文の論点は、学校教育の典型的要素としての社会的環境のなかで行われる全心を打ち込んだ目的的活動は、現在いとも簡単に無視されている子どもの生得的な能力を認め、それを開発することにある(10)」。

(4)「附随学習」の意義と重要性

元来、学習というものは、単純な形では行われ得ないのであり、学習指導において教師は3つの反応(学習)が同時に行われるように常に配慮すべきなのである。そして、キルパトリックが最も強調したのは、「附随反応」(学習)であったことに留意しなければならない。

「附随学習」(concomitant learning)の重要性について、例えば市村尚久氏は、いままで述べてきた論脈でキルパトリックの学習論が完結するならば、それは従来の「プロ

ジェクト」に関する諸説と何ら異なるところがないという前提から、「『目的的活動』という理念と並んでプロジェクト法を構成するいま一つの『附随学習』の理念こそ、キルパトリックのプロジェクト法をユニークなもの、つまり単なる教育方法としてでなく生活教育の哲学として高く評価すべきものにして(11)」と刮目に値する見解を披露する。

同様に佐藤学氏は、「『附随学習』のアイデアなしでは、『プロジェクト・メソッド』の定式化は行われなかった(12)」と述べ、社会的態度と性格の形成に附随学習が果たす人間形成的意義を強調する。

キルパトリック自身は、附随学習の意義について、算数の学習を具体例として次のように説明している。

「一般には子どもは算術だけを学習していると考えられているが、子どもはそれよりもはるかに多くの事柄を学習している。子どもはそれによって算術が好きであるか嫌いであるかの態度をつくっている。子どもは教師の束縛から逃れても算術を続けてやろうとしているか、それとも少しでも早くそれから逃れようとしているか、どちらかの態度をつくっているのである。子どもはまた教師や学校を好きになっているか、嫌いになっているか、どちらかの態度をつくっている。子どもたちは絶えずこういう態度をつくっているものであって、こういう態度はわれわれの教える教材よりもはるかに重要で且つ長く人生に影響を与えるものである。(13)」

キルパトリックの「附随学習」は、繰り返すようであるが、算数を学ぶ子どもたちは実は算数だけを単独に学んでいくのではない。これと相伴って、算数が好きだとか嫌いだとかという感情、忍耐強く事に取り組むとかいかげんにごまかすといった態度や習慣、あるいは、がんばれば何でもできるのだという自信、逆に自分は何をやってもだめなのだという劣等感など、さまざまな感情・態度・習

慣などを同時に学んでいくものだといっているのである。

キルパトリックがプロジェクト法を学習の中心的な方法として重視した理論的根拠の一つは、この「附随学習」という学習観に求められる。伝統的な教育方法と違い、プロジェクト法はさまざまな望ましい感情や態度などを附随的に学ばせるうえで、最も効果的なやり方であると考えられたのである。

学びから逃走する子どもの現状に鑑み、子どもは「一時に一事を学ぶのではない」とする附随学習の考え方を、教師は、教室実践の中で再生する必要があるのではなからうか。

4. 定式化されたプロジェクト法の諸相

これまでの検討で明らかなように、プロジェクト法は単なる一指導法ではないのである。それは根底において重要な教育観、目的観、内容・方法観、学習観を包含する「教育方法の哲学の大系」と称してもよいであろう。

従来のプロジェクト法の論述は、一部の研究を除いて、こうした視座からの考察が欠落していたように思われる。プロジェクト法が皮相的に形骸化されて理解されるのは、そのためではなからうか。

さて、キルパトリックによって定式化され発展されたプロジェクト法の段階・類型・種類などの諸相についての吟味に入りたいと思う。

(1) プロジェクト法の学習過程

目的的活動を単位として、キルパトリックは典型的に「目的・計画・遂行・判断」という生活経験学習の基本的過程を定立した。各段階と教師が留意すべき点について、次のように整理できよう。

① 目的設定(purposing)

当面している問題を自ら解決するように、子ども自身が目的を発見し、設定する段階。旧来の方法では目的設定は教師の責任とされ

ていたが、目的は教師と子どもとの協力によって立てられる。すでに触れたように、子どもの性格形成がプロジェクト法の終局的な目的であるため、できるだけ子どもの自主性や自己活動を尊重することが望ましい。

しかし、究極の責任はやはり教師にあり、子どもにのみ責任を帰することのないよう配慮しなければならない。子どもだけでは、教育的価値の薄い目的や実行困難な目的設定が行われることも考えられるからである。ここに教師の指導性が問われるといえよう。

② 計画 (planning)

目的を達成するために、できるだけ多くの資料や経験・知識を集めて綿密な計画案を立てる段階。プロジェクト法の成否は、周密な計画が立てられるかどうか依存する。子どもは目的から直ちに実行に移りやすいが、教師は計画の重要性を認識させる必要があろう。計画が集団でなされる場合、討議の形をもってこれを行うことが望ましい。

③ 遂行 (executing)

計画案の遂行に必要な材料を集めて実行する、最も活気のある段階。プロジェクト法では遂行の結果よりもプロセスに重きがおかれる。遂行の過程で子どもの性格が形成されることを重視するからである。目標の実現まで、教師のよい支援は陰に陽に、影の声として大切である。

④ 判断 (judging)

遂行した作業や活動を省みて、計画が実現したかどうかを判断し、評価してみる段階。この場合の教師は、作業の審査や決定ではなく、子ども自らが成果を判断できるよう指導しなければならない。子どもの判断が困難な場合、それを容易にするため暗示・助勢する配慮が望ましい。子どもの相互判断の態度を養うことも忘れてはならないであろう。

これらの過程のなかで全心を打ち込んだ目的的活動が進行するのであるが、その結果、子どもは自主的な学習を達成し、充実した成

功感をもって知識や技能を体得することが期待されるのである。

(2) プロジェクト法の類型

キルパトリックはプロジェクト、すなわち目的的活動を4類型に分けて、おおむね次のように説明している。

① 構成プロジェクト (construction project) 生産者プロジェクトともいう。このタイプはポートを作ったり、手紙を書いたり、劇を上演したりといった、外的形式において観念や計画を具体化することを目的とするものである。「目的・計画・遂行・判断」の基本的な学習過程を踏む。

② 享受プロジェクト (enjoyment project)

消費者プロジェクトともいう。このタイプは、物語を聞いたり、シンフォニーを聴いたり、絵画を鑑賞するといった美的経験を享受することにある。ただ、この種のプロジェクトのたどる段階は明確に示せないとキルパトリックは言う。

③ 問題プロジェクト (problem project)

霜はおりるのか、どのようにしてニューヨークはフィラデルフィアよりその規模が大きくなったのかといった、知的な面で困難が伴う諸問題を解決する目的のタイプである。そのプロセスは、デューイの反省的思考の進行過程をたどるという。

④ 学習プロジェクト (learning project)

ドリル・プロジェクトともいう。このタイプは、書字学習やフランス語の不規則動詞が書けるなどの知識や技能を得るのを主たる目的とする。ここでキルパトリックは、プロジェクトとしてのドリルと、強制された作業としてのドリルとは厳密に区別する必要があるとしている。そして、構成プロジェクトと同様の基本的な学習過程を経るといふ。

キルパトリックが、知識・技能を習得する活動も音楽を聴く活動も、さらに消費活動も含めてプロジェクトをとらえていることは、明らかである。こうなると、学校における学

習全体がプロジェクトであるという解釈さえ成り立つであろう。

初期のプロジェクトは、家庭や地域社会のなかで現実的・物質的なものを対象に、その結果も、具体的な事物を生産する実際の・技能的なものに限定されていた。これと比較すると、プロジェクト概念がいかに拡大解釈されるようになったか、この類型から判断して具体的に理解できるのである。

改めて確認することになるが、キルパトリックのプロジェクト法で重要なことは、学習結果がどんなものであろうとも、あくまでも「目的的活動」であるかどうかをバロメーターとなることを銘記すべきであろう。

子どもが進んで興味をもつような活動を中心にして、教師が子どもの指導にあたるならば、たしかに学習効果を高めることが期待できる。プロジェクト法の存在意義は、こうした自発活動をもって学習を指導する理論を構築したところに求められるのである。

(3) プロジェクト法の種類

キルパトリックは、プロジェクト法には個人の立てる目的によるものと、あるクラスが劇を上演したり、子どもたちがチームを組んで野球をするといった集団によるプロジェクトがあると言う(14)。そこで、個人プロジェクトと集団プロジェクトの指導の要点について考えてみよう。

① 個人プロジェクト

これは子ども各個人がそれぞれ独自の作業に従事する場合であって、その中でも2つの形式を考えることができる。

(a) 同質的な個人プロジェクト

これはすべての子どもが、同じプロジェクトに従事する場合であり、これを指導する教師の立場は比較的容易である。しかし、プロジェクトを行う子どもが同時に同一の興味をもち、熱意を示すことはまれであることに留意すべきであろう。

(b) 異質的な個人プロジェクト

これは子ども一人ひとりが、その能力や興味によって異なったプロジェクトを実行する場合である。子ども一人ひとりが興味のままだに活動することになるから、その作業の成果には見るべきものがあるだろう。しかし、これを指導する教師には相当な力量と指導上の困難を感じる事が予想される。

② 集団プロジェクト

これは学級全体が一つのプロジェクトの解決に向かって、協同的な作業をすることを意味する。その際、特に重要なことは、その集団が共通の目的、共通の興味において結合できるかどうかをキーポイントとなる。

どのようにして共通の目的に結合させるかは難しい問題であり、効果的に実現するためには同一プロジェクトのなかで作業を分担するなど、お互いの連絡を密にすることが必要である。

集団プロジェクトは共通の目的のために共通の計画を立て、それを実現するものであるため、協同性を媒介として社会性の育成が期待される。これは個人プロジェクトでは得られない貴重な経験である。

5. 「プロジェクト法」の特徴と展開

(1) プロジェクト法の特徴

佐藤学氏は、『米国カリキュラム改造史研究』のなかで、キルパトリックの論文「プロジェクト・メソッド」の特徴について4点を指摘している(15)。キルパトリックのプロジェクト法の理論の特質が奈辺にあるかを理解するうえできわめて有効であると考え、ここでは佐藤氏の枠組みに依拠しつつ、筆者なりに次のように整理してみた。

第1の特徴は、プロジェクト法の本質として「目的的活動」を教育の中心におき、「価値ある生活の典型的な単位」で、「プロジェクト」を規定した点である。

この規定は、学校外の「価値ある生活の典型的な単位」を学校教育のなかで実現する主

張であり、「学校と社会の結合」を図るうえで今日的にも意義があろう。

第2の特徴は、「目的的活動」の概念で、すべての学習の様式を包摂し、その分類と「目的・計画・遂行・判断」という学習の基本的プロセスを経て定式化した点である。

第3の特徴は、プロジェクト法がソーンダイクの行動主義の学習理論・学習法則を踏襲し基礎づけられた点である。

特に、「目的的活動」の成功の満足感の効果が性格形成に寄与するという考え方は、今日の教室でも考慮されなければならない。

第4の特徴は、「目的的活動」による学習の反応を、「第一次反応」、「連合反応」、「附随反応」の3つの層でとらえ、学習の重層的な構造を示した点である。

この「附随学習」の明確化にこそ、彼のプロジェクト法の本意があった。

(2) わが国への導入・展開

プロジェクト法は、伝統的な言語主義・知育偏重主義にチャレンジして、カリキュラム改革の契機となったことは高く評価されよう。しかし、かつてのように、その重要性を極度に強調したり、その適用範囲を教育の全領域にまで拡大するならば、教科の論理的系統や教師の指導的役割を軽視すると批判されてもやむをえないかもしれない。

なお、キルパトリックは1927年来日し、各地でプロジェクト法について講演している。わが国教育界においてもプロジェクト法への関心が高まっていたこともあって、多くの聴衆を集めたといわれる。

しかし、やはり概念が不明確なこともあって、一部を除いては、教育現場には必ずしも深く浸透したとはいえなかったようである。それでも総合教授や作業教育などと結びついて、当時の自由主義的教育運動に大きな影響を及ぼしたといわれる。

プロジェクト法が改めて注目されたのは、戦後新教育のコア・カリキュラム運動におい

てであった。この運動のリーダーであった梅根悟氏の単元学習論や生活教育論は、キルパトリックのプロジェクト観を基礎にして展開されたものであり、わが国にカリキュラム・ブームを巻き起こした。しかし、系統学習への傾斜により、プロジェクト法は急速にその影響力が弱められたのである。

生活科実践をはじめ、現在の「総合学習」や「知の総合化」「学校・家庭・地域の融合」論議のなかで、「目的的活動」による「附随学習」等々、今日、キルパトリックに学ぶ重要性が増しているのである。

〈注・参考文献〉

- (1) 松村将「キルパトリックのプロジェクト法」(鯨坂二夫編『教育方法学の位相と展開』所収) 福村出版・1987、p.80.
- (2) 松村将『デューイ派教育者の研究』京都女子大学・1997、p.78. 筆者が一部修正して引用。
- (3) 松村将 前掲書、p.49
- (4) キルパトリック・市村尚久訳『プロジェクト法』明玄書房・1967、p.11. 訳語は一部変更して使用。以下同様。
- (5)(6)(7)(8)(9)(10) いずれも前訳書それぞれ、p.13, p.9, p.17, pp.22~23, pp.28~30, p.55
- (11) キルパトリック・市村尚久他訳『教育哲学2』明治図書・1969、p.336
- (12) 佐藤学『米国カリキュラム改造史研究』東京大学出版会・1990、p.138
- (13) キルパトリック・西本三十二訳『新教育の創造』牧書房・1948、pp.112~113
- (14) 前訳書(4) p.14.
- (15) 佐藤学 前掲書、pp.136~137